

第十七章 銀河鉄道出発

朝の大連の駅はいつになくあわただしかった。銀河鉄道666としてアジア号が復活する日だったので、野次馬や記者も取材に来ていた。

動力車の前では目立ちたがりの満州映画協会理事の甘粕正彦が新聞社の取材に高飛車な態度で応じていた。

列車に乗り込む乗客たちは各団体ごとに駅に集まるはずだが、例によつて勝手に飛び回りたがる人たちなので、団体行動などできるはずはなかった。

出発式の式典には未造技師達警護の軍人と、記念品目当てで並んでいる阿保野論氣二等兵。甘粕正彦を嫌っている将校たちはとろろん娘に「大本営を代表して行ってこい」と指令を出したので、防空頭巾にモンペ姿で水筒と背囊(リュック)を背負って一番先頭に並んでいた。そして家族から離れて迷子になつてやつてきた男前家の弟君がおむつをしてせんべいを食べながら、演説をする甘粕正彦の周りを飛び歩いて注目を集めていた。

やがて、どこからともなく人がぞろぞろ集まり搭乗手続きが始まった。とろろん娘は迷子の弟君を背囊に入れ顔だけ出して家族を探した。

リュックから顔を出してせんべいを食べている弟君を発見したのは童話作家のナオコさんだった。

「あら、フリチン君どうしちゃったの？」

とろろん娘は出発式典に紛れていたことを説明した。この列の後方に男前家が見たのを目にしていたナオコさんは、弟君を抱いて人の波を逆行して無事引き渡すことができたが、男前のカオリさんだけは弟君を探して列車の周辺にいた。

窓に搭乗する人の顔が見え始めたので、もう搭乗が始まっていると察したが入り口が見つからない。列車の左側にいたからだ。

みんなどこから列車に乗り込んでいるのだろうか？と歩いて行くと、出入り口らしきドアが見つかった。ドアを開けて中に上がると食堂車の勝手口で、中岡三世料理長が仕込みをしている最中だった。列車の右側に入り口があるから、そこから入ってくださいと言われ、またぐるりと玄関を求めて一回りすると、家族三人が搭乗口前で待っていた。結果的に男前のカオリさんが迷子になつたと言ふことになつてしまった。

「ちよつとあなた！イヤシケイやないの？」

銀河鉄道の機関士の祖谷氏敬は長いストリートヘアーの謎のおねえさんに襟首をつかまれると出発ホームのベンチに座らされた。

「あなた、しばらく連絡ない思うとつたらこんなところで機関車の運転手してはったんか。それで、どないやねん。婚活はうまくいったんか？」

「いや、なかなか思うようになりませんが、やはり世の中なんといつても金です！」

「それであんた、満鉄で運転手して金稼いどるんか？」

「まあ、そこはそれなりの事情がありまして……ハイ。」

「なんでもええけど、しつかり運転するんやで。おつきい列車やハンドルさばき期待しとるで。」

「ハンドルさばきはあまり関係ないかと……鉄道ですの。」

祖谷氏敬が答えている間に謎のお姉さんは姿を消していた。目の前には若いお嬢さんが

立っていたので、ベンチを譲ろうと祖谷氏敬は立ち上がった。

「お嬢さん。よろしければどうぞ！」

と、席を譲ると、お嬢さんは身の危険を感じ、慌てて立ち去って行った。祖谷氏敬はポツンとその場にたたずんでいた。

列車の最後尾には奇妙な車両が連結されていた。連結器でつながってはいるが、渡り廊下が設置されていない隔離されたような車両。昨日、刈り上げ頭の運舩が強引にねじ込んできたコミンテルン一行を乗せる車両で、とりあえず用意はしたものの、廃棄処分直前の車両をおまけにくつつけるのが精一杯。他の準備はできなかった。

平等を旗頭にしながらも、大多数の犠牲の上にごく一握りの人たちがおいしい思いをする。共産主義の現実にとつとつて、運舩達幹部は高級車両に乗り込んでいたが、その他諸々は貨物車両に毛の生えたような箱に押し込められているのが実態だった。

最低車両に乗る方も基本的に無知と妬みを原動力にしている無産階級の低俗な人間だから、列車なんか乗ったことがないし窓がついているだけで大喜びだった。

八路軍シンの地元の漁民に変装したシヨウ・チャンツーはバケツに入った生牡蠣を差し入れた。

「日本人はこうして生で牡蠣を食べるねん。」

日本在住だった朝鮮人と思われる女が牡蠣を生で食べて見せると、ピースでポーっとした一行は、そうだそうだ！と日本人になった気分ですぐ瞬間にバケツ二杯の生牡蠣を食べてしまった。

牡蠣を生で食べられるのは広島など瀬戸内海くらいのもので、大連の牡蠣を生で食べるなどただでさえ危険極まりない。が、現代でも生牡蠣を食べて帰りの飛行機のトイレに閉じこもる日本人は少なくないらしい。

「次男坊を食べた仕返しだ。」

シヨウ・チャンツーは昨夜連中に食べられてしまった犬の次男坊の仕返しをしたのだった。

「革命の同志諸君。諸君らが新しい思想を持ち帰ってくれることを願っています。これはカンパで寄せられたものです。毛同志も期待しております。」

と八路軍風の衣装をまとった風魔忍者のマチ姐さんは、帽子を深くかぶりマスクで顔を隠した姿で、黄海で獲れたエビを差し入れた。

運悪くと言うより、運よく警備の兵隊が

「貴様何者だ！」と走ってきたので、

「これにて失礼！」

と疾風の如く忍者走り姿をくらしました。

多分、簡単には出発できないだろうと予想していた満鉄の屋島君は予定の時間より三十分早い時間を搭乗客に伝えておいた。

屋島君の予想は的中し、皆が客車に収まったのが出発時間の二分前だった。一番先頭の車両には軍関係者が陣取っていた。場違いな場所に放り込まれてしまった阿保野論気（あはのろんげ）二等兵は困惑していたものの、「なんでこんなのが混ざってるの？」と阿保野論気も首をかしげるもん。姿のとろろん娘が、車掌の如く活躍している姿を見ていくらか安堵した。

関東軍の舞子売(まいこうる)中佐はご機嫌満開で、同じ車両にとろろん娘が来てくれたためハッピーで舞い上がった。酔うと嬉しくなり嬉しくなると人を殴りたくなる性分なので、満州映画協会の甘粕正彦はフルボッコにされた。

姑息な甘粕正彦がボコボコにされたので軍の幹部も大喜びした。「酔った上のことなので」が公然とまかり通るおおらかな時代だった。

舞子売中佐は自ら持ち込んだ酒類を持つて各車両に振る舞いにまわることにした。その後を車内販売の売り子に扮したとろろん娘がカートを押しながらくっついて行った。

「ビール、日本酒、ワイン、各種取り揃えております。御用ぬ方はお声がけください。」列車の走っていない沖繩。これはいい土産話になるととろろん娘は張り切っていた。

「あら、こんなお仕事もするの？軍の事務員さんって大変ね。」龍笛さんに声をかけられた。

「お国のためやいびーん、張り切つて仕事をしてるサー。くれえ、中佐殿からやい。」かきの種とリンゴジュースを龍笛さんに手渡すと、

「おーい。とろろんねえちゃん。こっちにワイン持つて来てくれ。」と舞子売中佐に呼ばれた。

「わしのおごりじゃ、どんどん飲んでくれ。ワインもいろいろあるぞ。」

「マルゴー、オー・ブリオン。ボルドーの名品じゃないの。ブルターニュの白もあるんだ。コルトン・シャルルマーニュ。」

菊宗政監督はとろろん娘が押してきたカートの中のワインを物色した。

「おー、色々あるぞ、インドシナ(ベトナム)でフランス軍を蹴散らした時にブンどつてやったんだ！菊正宗もあるぞー！」

「あら、白ワインもあるの？アルザスのリースリングもあるじゃない。」パッパラおばさんも駆け寄ってきた。

「そいつは青島でドイツ兵と酒飲み試合に勝つて得た戦利品じゃー！」

「アルザスはドイツの近くですものねえ。年代はわかる？」

「そんなものは知りませえん！わしゃ皇紀しかしらん。」

「なんだ、おみやーさんも名古屋人きやー。遠くからよお来てくれた。おみやあさんは？そおですかあ、秋山兄弟と同郷ですなあ。まあ飲みなせエ。」

こうして各コンパートメント(列車の個室)を回っていく舞子売中佐であった。

「お、おみやーさんはあんとときの・・・。」

「ああ、いつぞやの青年将校ぞん。」

九州のまさおさんと舞子売中佐は二・二六事件の時に出会っていた。薩摩の大御所の御息であった九州のまさおさんは、名家の息子しか入れない近衛連隊に所属しており、舞子売中佐は陸軍士官学校本科から大学校へ進んだ冬に起きたクーデター事件であった。二・二六事件はゾルゲ事件同様戦後まで隠蔽されていた事件だった。この事件の時には朝日新聞社の東京支社も爆破された。

理由は知らされないまま皇居周辺の警護に行かされた舞子売青年は二重橋に立つ任務を命じられた。同様に近衛隊から二重橋の警護に回されたのが九州のまさおさんだった。

お互い、帝都で何が起きているのかわからぬまま橋を挟んで背を向けて立っていた。

やがて、舞子売青年は自分たちの仲間が岡田総理を暗殺し、昭和維新を叫んで天皇に直訴しようとしていたことなどを知った。

背中越しに舞子売青年から話を聞いた九州のまさおさんは、それで軍人たりとも通してはならぬと言う命令が出たことに合点がいった。

舞子売青年も自分の同僚たちが何か動きを見させていることは察していたし、誘いも受けたが相手にしなかった。そのため、仲間外れにされ”非国民”のそしりを受けたこともあったが、筋が違うと頑として受け入れなかった。

「こんなに偉くなられて、武勲をおたてになられたのですな。」

「いえいえ、運がよかったです。」

軍事施設を作るために土地を提供してもらうなど、多大な貢献をしていた九州のまさおさんの名前は知っていたが、この時初めてあの時の人物だったのか？と線が繋がったのだった。

舞子売中佐が各車両に一通り酒をふるまって戻ってきたら、菊宗政監督が廊下にしゃがみこんでいた。ワインの飲み合わせが悪かったのか？

「誰じゃあ！女性にこんなに酒飲ませて！そういうことすい下心は許せん！」

舞子売中佐が大声を上げると、

「あんたが飲ませたんだらう！」
と空きビンが飛んで来た。

舞子売中佐は軍部車両の出入り口で立ち番をしている未造技師に

「こいつらに注意しておけ！」

と、車両とコンパートメントの番号が書かれた座席表を手渡した。

酒を振る舞いに各車両を訪ねて回って、酔っ払い将校を装いながら不審人物をチェックしていたのだった。

未造技師長は車掌室にいる警護長に座席表と舞子売中佐からの伝言を伝えると、

「それではさっそく未造伍長に乗員検査に回ってもらおう。同行は貴様と……」

と、未造技師長の隣にいた一等兵を指さし、ちようどトイレを通りがかった阿保野論気二等兵を指さし、

「貴様！同行せよ。」

と命令した。

「誰あの一等兵？」

未造伍長と一等兵は顔を見あった。阿保野論気二等兵も居心地の悪い高級幹部の部屋にいるより、こちらの方が気が楽と検査にくっついて行った。

世間一般には一番妖しそうな人物が乗り込んでいるコンパートメントでは、次に停車するであろう奉天についてショウ・チャンツーが説明をしていた。

「張作霖(ちようさくりん)爆死事件の現場はどのあたりなの？」

マチ姐さんの質問に、ショウ・チャンツーは簡単な図を描いて説明した。

「奉天の手前だ。昭和三年か、ずいぶん昔のことだ。柳条湖事件は奉天の先だな。」

これらの事件も戦後までは表に出てこない内輪の事件であった。張作霖爆死事件は関東軍首謀説になっているが、ソビエト、国民党説もあり、毛沢東が指示した事件と言う話もある。

「ジユンでーす。長作でーす。もう一人はリンやったっけ？昔の話やなあ。」
レツゴー三匹のことを話しているのか？と赤井五平は思った。

「乗員検査だ！開けるぞ！」
未造技師は乗員名簿と見比べた。アフロアーの葉加瀬太郎のような暑苦しい男に、スケバン女子高生風のそこそこ塔が立った女、そして、あれ？赤井二等兵。

まさか、脱走兵になっていたのか？と察した未造技師であったが、ここで公にするのは忍びなかった。重慶郊外の村で自分を助けてくれたが赤井二等兵ではなかったか？と考えていた未造技師だった。同行している部下の手前、見て見ぬふりをした。

名簿には四人とあったが三人しか乗っていないので

「もう一人はどうした？」

「はばかりに行ってるんじゃないの？それとも見に行く？」

マチ姐さんに言われて目を伏せる未造技師だった。

飛騨忍者のミサオちゃんは白影さんに教わった大凧に乗って列車を上空から監視していた。

「いやだ、トンネルだ！ギエー。」

列車がトンネルから出ると、大凧もミサオちゃんも真つ黒になって再び空に舞い上がった。

「検査は以上だ！気を付けてな。」

と未造技師は扉を閉めた。舞子売中佐がなぜあの妖しい連中の欄にチェックを入れなかったのか？不思議な思いがしたが、うかつに騒いで赤井二等兵のことがばれては不憫だろうと「異常なし」にチェックを入れた。

「気づかれたかもしれへんな。」

赤井五平は額に汗を浮かべていた。

「心配ない。上は既に知っているよ。それより今の伍長、重慶で命を救ってやったのに、私の変装には気が付かなかったな。今度はギター持って来て福山雅治に変装しようかな。」

「満悦のショウ・チャンツーだった。その横で「ムリムリ」とマチ姐さんが首を振っていた。

ショウ・チャンツーの隣のコンパクトには五つの星がついていた。

「いいか、何か不穏な動きがあったら容赦なく撃て！」

と同行した二人に命令したが、大名旅行の名代で来た阿保野論気二等兵は銃を所持していなかった。

「お前、銃は？」

と問うと、阿保野論気二等兵の足元で、男前家の弟君がおもちゃのピストルを手渡してくれた。今日はしっかりとおむつをしていた。

「乗員検査だ！開けるぞ！」

と、扉をあけると中年の女性が三人乗った部屋だった。アツ。未造技師は見覚えがある顔を見つけた。かつて高槻の軍事工場建設に携わった時に、破壊、妨害活動を指揮していた清美がいた。と、言うことはこの連中はコミンテルンの者たちか。舞子売中佐のチェックの意味をようやく把握できた。

「ちよつとあんた、いい男じゃない。」

日本死ねシオリが未造技師にまわりつこうとした瞬間、阿保野論気が男前家の弟君に

借りた拳銃が発射された。中には飲み残したミルクが入った水鉄砲だった。日本死ぬシオリの顔にしたたる卑猥な白いミルクを見て、阿保野論気は前日泊まったホテルで男を引き連れ、隣の部屋の女だと思いだした。

もう一人は日本人と言っていたが査証には中国人とあった。いったいどっちなんだ？

未造技師は「要警戒」とリストに書き込んで部屋を出た。

「先ほどありがとうございます。」

未造技師は水鉄砲を撃った二等兵に礼を言った。阿保野論気も伍長の階級章を付けている下士官がこんなに礼儀正しく接してくれるとは思わなかったので、この人は立派な人物に違いないと思った。

検査を終えると未造技師は車掌室にいる警護長の元へ報告に行った。

「それではうちやこれから自分の車両に戻りますんで。」

と阿保野論気は軍の幹部たちの専用車両に入って行った。

「今の兵士は何者だ？」

「自分にはわかりません。上官殿が帯同させたのであつて。」

「三つ葉葵の印籠とか、持ってなかったかい？それとも、絵は描かなかったかい？いろ紙を飯粒で張り付けた。火花の絵なんか。ぞんざいに扱って、ないよねえ。」

上官殿は田中邦衛に似ていた。

「た、多分。」

謎の二等兵の出現に戦々恐々とする警護員たちだった。

隔離車両のようなコミンテルン御用達車両はとんでもない状態になっていた。

変装したショウ・チャンツーが持ち込んだ生牡蠣と、マチ姐さんが差し入れた黄海産のエビを食べて下痢と嘔吐と脱皮を繰り返す狂乱の舞台と化していた。

「列車に酔うとは、革命に対する忠誠心と自己批判が足りないからだ！」

食あたりではなく列車に酔ったものだと思ひ込んでいる馬鹿な連中だった。

「総括だ！総括せよ！」

元々腹にあった内部分裂の萌芽がこの機に一気に噴き出したのであった。それぞれ異なる組織から共産主義を学ぶために寄せ集まった連中なので、上の人間がいなくなれば自分たちが仕切れると虎視眈々と勢力争いのチャンスを探っていたのが一気に爆発した。

「貴様は何を学ぶためソビエトに渡るつもりだ！」

「私は女優の岡田嘉子さんのようにメイエルホリドの演劇を学び、日本に共産主義を啓蒙するためにソビエトに行きます。」

その岡田嘉子は駆け落ちして樺太の国境を越えた演出家の杉本良吉と共に日本人スパイとして囚われの身になり、杉本は死刑、岡田嘉子は慰み物になりながら生き残った。メイエルホリドだつて既にスパイ容疑で銃殺されていた。

「甘い、そんな演劇程度でプロレタリアの精神が極められるか！自己反省せよ！」

こうして一人一人リンチ処刑の対象になり、線路に捨てられていった。

その一部始終を大風の上から飛騨忍者のミサオちゃんが監視していた。

配下の者がどうなろうと知ったこっちゃない。「上へ上り詰めていた清美、シオリ、蓮舫の三人はお互いの腹を探っていた。当面の共通の敵は「排除」した瑞穂だったが、瑞穂は独自の一団を率いて朝鮮北東部から満州入りしていた。

ハルビンに行けば、菅や仙谷や枝野がまとめてくれるだろうと期待していたが、既にこの連中が海底で魚の餌になっているとは思っていなかった。

清美は蓮舫をパフォーマンスだけでポカーンと口を開けているバカ女だと見下していたし、シオリを男狂いした淫乱女だと卑下していた。

蓮舫は直美を、言うことだけは達者だが都合が悪くなるとすぐ雲隠れする能無しと思っており、シオリに対しては何一つ仕事もできないくせに股間に愛液したたらせては男を追いかけるだけの色情狂とみなしていた。

シオリは蓮舫を所詮熱湯風呂から成り上がった読み書きもままならない中国人じゃねえかと思下し、清美をバイブレーターにしか相手にされない下品な朝鮮女と考えていた。

あくまで彼女らがお互いをそのようにリスペクトしているのであり、作者はそんなお下品なこと考えたことはございません。しいて言うなら、これが世論ですかね？

大地が地平線に飲み込まれる頃、食堂車では中岡三世料理長のディナーが用意されていた。酔っぱらいのおじさんばかりの車両にいても面白くないとろろん娘は中岡三世料理長の食堂車にウエイトレスに行くことにした。

「あら、これからウエイトレスさん？でもその衣装では古臭いわね。」
廊下で出会った龍笛さんは裁縫道具を出すと、とろろん娘のウエイトレス衣装をちよつと手直ししてくれた。

「モダンな衣装んかいました。さすがお能ちゃんぬあんまー(お母さん)やい。」
ゴスロリ風メイド衣装に見事に仕立てあがっていた。

炎を巻き上げながら中岡三世料理長は次々と料理を作り上げ、バイキング方式でテーブルに並んだ大皿の料理を各自が取り分けてコンパートメントに持ち帰ったり、食堂車の席で食べていた。

「これはね、麻婆豆腐と言う支那の南の料理で、辛いかもしれないよ。」
新婚旅行のヒデブ夫妻が食堂車のテーブル席で夕食をとっていた。

「あ、ちよつと辛い。」

「そう？辛かったごめんね。」

「でも、とてもおいしいわ。」

と、手を握り合うヒデブ夫妻の隣の席では

「甘くって見てらんねえや！」

と菊宗政監督がビールをがぶ飲みしていた。

軍の幹部たちは舞子売中佐が

「わしのおごりじゃ！どんどん飲んでくれ！」

と飲ませたものだから、皆、酔いつぶれていたが、とろろん娘は幹部車両へとカートに料理を積んで運んでいた。幹部車両で暇をもてあそんでいた阿保野論気二等兵には至福の時が訪れ、大半は彼に食べられてしまった。

「え？ 私たちにも同じ食事が出るんですか？」

とろろん娘が食堂車から警護の車掌室に料理を持っていくと、未造技師たちは大喜びした。警護担当の隊長は急な指令に兵士の食事のことまで計算に入れていなかったためどうしようか？ 困っているところだった。

「舞子売中佐が持つていくよう命令を出してくれたんやい。ばんない食べてくれみそれ。」

「わしのおごりじゃ！ どんどん食ってくれ、飲んでくれ！」

食堂車で声を上げる舞子売中佐だが、これは当初から銀河鉄道の予算に入っていたものだった。

夕食でにぎわう乗客たちの中で、静かに息をひそめている人たちがいた。海軍から今回のツアーの潜入調査を任せられた富井潜水夫と説博士にアンニンだった。潜入調査と言われてもあまりにも濃いキヤラの乗客たちに阻まれ、何をして良いやらわからなかった。

しかも、潜り込めと言われた富井潜水夫は潜水服を着用して列車に乗り込んでいた。

「あ！ 富井てめえ、こんなところで何してるんや？」

長いストリートへアーの小柄な女性が開けっ放しだった扉から中に入り込んできた。

「かおり姫こそこんなところで何してはんねん。大坂ところ払いになったんやないの？」

大阪を追い出されて徳島の地元企業で働きながら花嫁修業をしていると噂されていた、大阪の女ボスカおり姫だった。

「なんやおもしろいこと起きそうな気がしたから、阿波から出てきたんや。それよりこの部屋随分狭いなあ。料金ケチったか？」

どの部屋も同じ四人部屋だったが、富井潜水夫と説博士とアンニンである。対象が大きいから狭く見える目の錯覚だった。

「まあええ、あんたらもついてきい。」

説博士とアンニンも連れてかおり姫は食堂車に向かうのだった。

食堂車のテーブルには二人の先客がいて場所をとっていた。

「雑誌記者のマルと荷物持ちの満湖やねん。」

席に来て座席を取っていたのはかおり姫の同級生で雑誌記者のマルさんと、女装した男性の満湖だった。

「え？ 今なんて言わはった？」

富井が聞くと

「満湖やろ。それがどないしてん。」

「今こつちを見ている人たちって、みんな関東の人だと思いますよ。」

と説博士が説明すると、富井は小さな声で、

「関東で満湖言うたら、大阪でオメコのことやねん。」

「そうやったん！ 満湖あんたこつちうえらい名前になつてはんで。どないするん満湖！」

「なんてこつたい！」

アンニンは頭を抱えた。

「ムー読んでたらな、ロマノフ王朝の財宝が満州に隠されたって書いてあつてん。」

「まさかそれを探しに来はったとか？」

かおり姫はウンとうなづいた。

「富井てめえ、潜りやすい格好しているやないの。手伝え！」

「潜ると言っても土の中ではなくて、これにはいろいろ訳がおますねん。」

「ええから手伝え！」

「なんてこつたい！」

アンニンは黙々と料理を食べながらぼやいた。

この会話を聞いてにわかには動きが激しくなった一派がいた。安德君たちの地理測量部の者たちだった。彼らはすぐに自分たちの車両に戻り

「我々の目的を察した連中がいます。あの恰好は海軍でしょう。」

地理測量部の狙いはロマノフ王朝の隠し財宝だった。富井の潜水服姿を見て海軍と判断したのだろう。通常こんな大陸のど真ん中に潜水服を着て乗り込んでくる海軍などおかしいと疑うのが普通だろうが、学歴エリートはこの程度の判断しかできなかった。

「奴らはどの程度情報をつかんでいるんだ？」

「詳細はわかりませんが、かなり確信的な情報を得ているようです。」

地理測量部の車両は緊張した空気が満ちてきた。そんな中、オタクの安德君は柴台社長の部屋で、フルカワ先生と宵宵先生に混ざって人麻呂式戦車の開発案に没頭していた。

「確信はあるでえ。この地図みてみい。」

と、ムーの別冊埋蔵金特集の地図を開いて見せた。田舎者お断りの六本木のバーのマッチよりもさらにデフォルメされ、わかるようにならない地図が乗っていた。

「これで何がわかるというのやら？」

アンニンが啞然としていると、

「行って見なわからんでえ。同じ地形があるはずや。」

記事に目を通してみると、白蛇様が夢に出てきてお告げがあったという内容だった。

「なんてこつたい！」

「ところでかおり姫は大阪とどこか払いになったんでっしやろ。」

「今は箕面におんねん。大坂なんかと全然違うでえ。」

「僕がいる伊丹は兵庫だけど大阪気質。箕面は大阪やけど兵庫県気質やなあ。」

「せやねん。デブの兄ちゃんよう言うた！大阪なんか横山ノックにくれてやればええねん。」

かおり姫は箕面の山の上で民のかまどに立つ煙を眺めているお立場になったそう、箕面の貸しポート屋のおやじさんが埋蔵金探しの資金を出してくれたのだとか。

「またけつたいな人がおんねんなあ。」

「笹川のおつちゃん言うねん。富井てめえ、一日一善やでえ。」

富井達三人が自分の車両に戻る途中の車両では男前家の弟君が廊下を飛び回っていた。男前のカオリさんがとっ捕まえては寝なさいと寝かしつけるのだが、眠るところか元気が増すばかり。三人が通りかかると説博士に

「おじちゃんお話して。僕おむつしてるよ。」

と、ねだつたので、説博士は廊下の折り畳み椅子を出すと

「サンクトペテルブルグにメンデレーフと言うおじさんがいて、元素周期表を作ったお話をしましょう。元素には質量があり、元素の原子量の順に並べるとその性質が……。」

説博士のお話が始めると弟君を除く車両の全員が深い眠りについたのであった。

一方その頃、シヨウ・チャンツーのコンパートメントでは次なる作戦が実行されていた。赤井五平が隣の部屋に行き、清美と蓮舫とシオリ相手に徹マンをするのであった。

この場合の徹マンとは決して皆さまがご想像なさっているようなお下品な意味合いはなく、徹夜で麻雀をすることとして、満鉄で徹マンは赤井五平が雀士として一度は達成してみたかった九蓮宝燈(チューレンポウトウ)に匹敵する、気高い栄誉であったのだ。

麻雀漫画では最後の南四局で主人公が大逆転して、女性が服を脱いでめでたしめでたしであるが、麻雀をしながら赤井五平が心理作戦を仕掛けて情報を引き出し工作をかける、苛酷な戦いが繰り広げられるのであった。

シヨウ・チャンツーは隣の部屋に聴診器をあてて赤井五平とコミンテルンの会話を聞き漏らさぬよう神経を使った。

マチ姐さんは何か重要なことを忘れていたのを思い出した。

「ミサオちゃん外に出しっぱなしだわ！」

風魔忍者のマチ姐さんは窓から列車の外に出て、飛騨忍者のミサオちゃんが白影さんから借りてきた大風を回収した。

ミサオちゃんが全身に巻いていた包帯まで煤で真っ黒になっていた。

シヨウ・チャンツーの両目をカツラでふさぎ、タンバリンを遠ざけ、車両のサモワール(給湯器)からお湯をかき集めてお風呂を用意した。

サモワールには弟君のおむつが干してあった。

客室車両でそんな騒がしい事件が起こっていることなど全くわからぬまま、動力車の運転室では祖谷氏敬が寡黙に銀河鉄道を運転していた。

ザクツ、バタン。ザクツ、バタン。同じリズムで黙々と窯に石炭をくべる男がいた。

松山から急いで戻ってきた秋田のネロさんだった。